
夏の午後の午後

秋乃時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の午後の午後

【Nコード】

N8283M

【作者名】

秋乃時雨

【あらすじ】

季節は夏。

一人の青年はただただ、歩いていた。

俺は、ただブラブラと団地の中を歩いて回った。

四年間、クラブの遠征や合宿で家にいない事が多かった為に俺は団地に住む人々の記憶から忘れ去られていたようで、会う人会う人皆「初めまして…」から始まる。

人によつては知った様に団地の彼是を説明して来る。

来て住み着いて高だかー、二年の奴がだ。

「俺、ここに来てもう14年になります」と言つと急に態度を変え「あ、この前集会にいましたよね」などと心の籠っていないその場を乗り切る為の言い訳をする。

ああ、俺、空気だ。

そついった事を考えながら、のんびりと自販機へ歩いていく。

梅雨が明け、日差しの鋭さが研ぎ澄まされて俺の柔肌を問答無用で滅多刺しにする。

長袖を着てくれば良かったかな、スリッパではなく靴にしておくべきだったかな、それ以前に外に出るべきではなかったかな、と自分の行動を後悔しながらマグマの様に噴出す汗を拭ってポケットの中の小銭の量を確かめる。

「缶コーヒーの甘いのか、レモン味の炭酸か、乳酸菌飲料か、炭酸味のレモンか……あ、やば、ちよつと意識が飛んだ」

ゆつくりのつそり、歩いて行く。

U字型の緩い上り下りの長い道を歩きながら、バス停横の自動販売機を見る。

ああ、ほんの50メートルが遠い。

眩きながら歩く。

ふと、遠くの地平線を見ると入道雲が浮かんでいた。

ふと、遠くから腹の底から唸る様な音が聞こえて後ろを見ると巨大な雷雲が浮かんでいた。

ふと、鳥がその近くを飛んでいる。

ゆつたりと、飛んでいる。

彼らから見た俺たちはどんな風に見えているのかと考える。

彼らの見る雲はどういう風に見えているのかと考える。

彼らの様に飛んで行けたら楽だろうかと考える。

ふと、何かが浮かんでふと忘れる。

考えては考えて、忘れ忘れて、また考えて忘れる。

ああ、自動販売機までの距離がまだ遠い、万里の道を歩く気分だ。

それがどんなものかは知らないが、そう思える。

ふと思う。

自転車に乗ればいいんだ。

ふと思う。

今、パンクして乗れないんだ。

ふと思う。

ああ、今度こそ修理しよう。

明日か明後日に。

今日は歩いていく事に我慢しよう。

そう思っ　て蝉の鳴き声に耳を傾ける。

夏が来たのだと、張り切って鳴いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8283m/>

夏の午後の午後

2011年1月16日04時02分発行